

# 大同工業大学 同窓会報

発行 大同工業大学同窓会  
名古屋市南区大同町2-21  
TEL(052)611-0511(代)  
印刷 名港印刷株式会社

## 同窓会報第2号 発行にあたり



同窓会会長  
新美経営労務事務所  
62M 新美一博

大同工業大学同窓会員の皆様、ますますご健勝、ご活躍のこととお喜び申し上げます。

さて、同窓会も発足18周年を迎え会員数も約6,000名にのびました。そこで会員各位の意思疎通を計る一助として、同窓会報を再発行することに致しました。各位の意見発表の場としてご活用頂くことを期待しております。

昭和57年度同窓会活動として、5月に総会、同窓会名簿発行、9月に同窓会関東支部発会式を主な行事として上げることができます。関東支部発会式には浅田学長の列席を始めとし、会員多数の参加を得、和やかなうちにも力強く第1歩を踏み出すことができましたことは大変喜ばしい限りであります。これを契機に相互の交流を深め、情報交換をされ、同窓生各位の一層のご発展を望みます。

話題を転じますが、企業をとり巻く経済情勢は今なお厳しく、前途に明るさが見えるものの総ての企業がこれを楽しめることは、考えられません。この混迷の中でも力強く生き残り、又伸びて行く企業はロボット、OA、メカトロニクス等の技術革新が急がれることが予想され、私達技術者に対する期待も大なるものがあります。専門分野で自己啓発に努めることはもとより、幅広く知識の吸収を行い、それぞれの持場で必要不可欠な人間に成長し期待に応える必要があります。同窓会も大同技術協会と協力して幅広い技術情報、経営管理情報の交換の場を設けて行きたいと考えておりますので、その際は是非ご活用下さいませようお願い申し上げます。

同窓会の内部体制固めとして事務局の努力により、11月にパーソナルコンピューターを導入し事務合理化を計っております。

母校におかれましては、58年6月に滝春校舎が竣工予定であり、最新設備を導入し産学一体の技術者教育を实践され、各方面から大きな期待が寄せられています。又、来たる大学設立20周年記念行事には同窓会の総力を持って支援したく、会員各位のご協力をお願い申し上げます。

今後ともご鞭撻とご協力を頂きながら、同窓会の発展に努力していきたくと思いますので、よろしくお願い申し上げます。



## 大同工大の 近況について

学長 浅田千秋

聞けば創刊号は、昭和45年11月10日発行で今度が第2号になるとのこと。

その間約12年間余りの空白ができたのは誠に残念であるが、今後は同窓会諸君の努力により毎年確実に発行されることを期待する。たまたまその創刊号を見るとその一面に第6回大同工大総会の案内が出ていて、会場は都ホテル、記念講演を私自身(当時大同製鋼研究所長)がやる事が発表されているのも何かの因縁を感じる次第である。



### 1. 昭和45年以後の大学の主な変化

創刊号発行後の12年間には、わが大同工大にとっても色々な変化と発展が起こっている。いまその跡を辿って見ると、まず昭和46年5月には兼任の成田学長から久恒学長に代った。昭和49年11月には成田理事長から現在の川瀬理事長に代っている。更に昭和53年10月には前田教授が副学長に就任し、引続き昭和54年4月に学長は久恒学長から私(浅田)に交代して現在に至っている。この間には成田前理事長が昭和50年4月逝去され、機械工学科では、関口教授、川口教授、上森教授、電気工学科の中山教授及び事務部の木下部長などの方々が相ついで物故されている。

施設や校地の関係では、まず昭和50年3月に白水地区に新校舎が建設され、4月から建設工学科として発足した。又昭和51年6月には滝春グラウンドの南に隣接した約14,500㎡の土地が滝春校舎として取得され当面滝春南運動場として利用され、且つその敷地内の建物約800㎡は滝春校舎として建設工学科と電気工学科とが使用することとなった。

昭和53年9月には、学内の施設として「材料科学技術研究所」が創設され、初代の所長には私が就任した。現在は、機械工学科の高木教授が所長をしておられる。この研究所は、まだ独立した建物はなく、専任の所員もない小規模の研究組織ではあるが、当大学の建学の精神「産学協同」の趣旨に沿って大同特殊鋼などの企業からの依託研究を主体に新材料やその製造技術に関する研究を行い、工業的にも着目すべき研究成果を挙げつつあるのは喜ばしいことである。昭和54年には大同学園創立40周年を迎え、高校と共用の新体育館が大同校舎の南部に隣接して新設され、その年の11月にこの新体育館で40周年記念式が盛大に挙行された。

教育面での一つの着目すべき点は、昭和54年5月に米国西岸のユージンにあるオレゴン大学との相互協力協定を結んだことである。同大学は100年以上の伝統を持つ有名な大学であるが、かねがね当大学の前田副学長と密接な関係があり、副学長の骨折りによりこの協力が成立した。それ以後、毎年8月の休暇中に40~60名の学生が約1ヶ月間、同大学及び西海岸の各地の研修旅行を実施し大きな教育効果を挙げている。



### 2. 大学の中期計画(第1次)について

現在当大学の定員は280名であるが、この数年応募学生の数も1,500名を越すようになり、又経営基盤の安定を計る見地から定員の2倍以上の640名前後を入学させているが、文部省の指導方針や私学財団からの補助金との関係もあって入学者の定員に対する倍率を下げるために増定員(280名→480名目標)を文部省に申請するの必要に迫られている。このためには、目標定員に対して必要な新校舎の建設と新校地の取得が必要である。又たまたま昭和58年は、大学創立20周年に当ることにもなり、大学としては昭和56年頃から学園本部と共に中期計画(第1次)及び資金の調達を策定し、校舎の整備の第1歩として昭和57年5月から現大同校舎の旧体育館跡に工作センター(650㎡)の建設に着手し、同年10月に完成した。このセンターは機械加工、溶接及び鍛造の3部門を持ち、大学全体の教育研究に必要な装置や試験片の加工を行うと共に、機械工学科の学生実習を実施する。更に滝春南運動場には57年8月より管理棟、講義棟、学生ホール並びにクラブハウスの建設が着々と進行しておりこの6月末には完成の予定で、その総面積は約6,000㎡である。これ等の校舎が完成の暁には従来と全く悪評があったわが大同工大の面目を一新するものと思われる。又卒業生から記念に贈呈を受けた御芳志はこの滝春新校舎の正面入口脇の校名を刻んだ自然石、並びにその周囲の造園のために使用させて戴く予定である。又この新校舎の建設と併行して、目下多半岛方面に約60,000㎡の新校地を物色中であり、これは当面体育やクラブ活動用のグラウンドにする予定である。これ等の新校舎、新校地が整備されその他の条件も整った後、昭和60年位の目標で文部省に増定員を申請する予定で具体案についても学内で目下検討を進めている。これらの計画の実施に

については約30億円近い資金を必要とし、その大部分は自己資金で賄うが、その一部については理事会社である大同特殊鋼(株)及び大学後援会の御援助を願う次第である。

### 3. その他の大学の最近の状況

大学の入試は、毎年12月の推せん者の面接試験、1月と3月に行う学科試験の3回実施しているから、毎年応募者は1,500人を越すようになり本年は約1,700名に達し、この中から約570名を入学させる予定である。大同の昔を知っている方には転た今昔の感に堪えないことであろう。これはもっぱら大学及び本部の教職員が全国の高校に出向いて広報活動を活発に行ってきた成果が実って来たものと思われ、その御苦労に対し深く感謝している。就職の方も世の中の不景気にもかかわらず幸いわれわれの工学方面は余り影響を受けずここ数年5,000人を越える応募があり卒業生のほとんど100%が各方面に就職しているが、今後も就職指導委員会などが中心となり新しい就職先を一層開拓してゆく方向で努力している。

どうか同窓生諸君も良い学生の推せんや新しい就職先の開拓について是非御協力をお願いしたい。

この頃成人教育、生涯教育などの必要性が盛んに言われているが我々もまだ小規模ではあるがこの分野の開拓にも努力をしている。最近従来の2年の委託生、4年の委託学生の他に主として現場の高校卒以上の入達を対象にした1年委託生制度を開始した。まだ全部を合せて20名に満たないが、その勉学意欲は極めて旺盛で普通の在学学生に対して、良い刺激を与えるものと思われる。又公開講座も世間で広く行われているが当大学でも昨年からの制度を始め、8月の約1週間「熱処理講座」を実施した。講師は学内、学外の有力な講師を迎え私自身も参加した。幸い中部、北陸地区の多数の会社から60名以上の参加者があり非常に好評であったので、生涯教育委員会が中心になり更に新しい講座も順次開設していく予定である。同窓生諸君も実社会で働いた経験にもとずいて更に新しい知識を吸収して自己を再教育するという立場からこのような計画に奮って御参加願えれば幸いである。

その他後援会の活動なども役員の方々の熱心な御協力により父兄を中心とした各地に於ける地方相談会の実施などにより父兄の方との意志疎通が盛んに行われるようになって来たことは喜ばしいことである。

### 4. 大学の今後の方針と問題点

最近アメリカでは、18歳人口の減少により大学への進学者が減少しつつあることと、不景気による政府の財政困難から補助金が著しく削減され約3,000校ある大学のうちこの10年間に140校位が廃校のやむなき状態になっているとのことである。従って各大学とも如何に生き残っていくかというために激烈な競争が行われている状況であると聞いている。幸い日本ではこれから約10年間位は18歳人口が増加するが、その後は低下の方向に転ずることは今から明かである。一方政府の補助金も第二臨調などの方針により従来毎年増加していたのが57年度からは相当の削減を受けることは明らかであり、又教育の多様化により大学への進学率も現に停滞を示しており、日本でもアメリカと同様、特に私立大学の経営は極めて厳しい状況に直面させられて来ている。われわれの大学も前記の中期計画の第1次計画の完成に引続き、更に第2次計画の実現(その内容と時期についてはまだ固まっていない)を計り、一層の内容の充実を行う必要がある。われわれ教職員は今後一層の自己反省も加え一致協力して教育・研究の質を高めて小規模ながらも特徴と魅力のある大学造りを行い、社会の進歩変遷に適応して強く生き残ってゆくことを考えたいと思います。

どうか同窓生諸君におかれても社会的地位の高まると共に皆さんの母校であるわが大同工大が上記のような目標に従って成長発展が遂げられるよう、益々お互いの結束を強めて母校との親しみを深め、且つ種々の面で御援助を賜るよう心からお願いする次第です。



## 偶 感

機械工学科  
教授 石橋正二

大同工業大学設立にかかわってから、もう20年もすぎた。近頃、とみに学生気質の相異が脳裏を去来する。このことについて、小生の皮膚に感じたままを書き綴ることにする。

1. 目的、目標が明瞭でない。この世に生をうけてから今まで、望んで得られなかったことは無かったのではないか、と思われる程幸福であったよう

な顔をしている。そして頭の中は空である。又、物事が順調に運ばないと簡単に劣等感におち入ってしまう。

2. 現状の認識が不足している。自分が今、どのような立場にあるか。自分を取囲む状況はどうであるのかについて、暗中模索の体である。

3. 要するに自分で考えることができないような状態におち入っている。そのため努力の方向が定められないこととなる。

以上、現在の学生についての、目についた不満な点の一端であるが、これを是正するとすると、なかなか一筋縄では行かないと思われるが、定性的には次のような方向を考えたら如何か、と思考している。

行住坐臥すべて教育であると考えて、現在ある学生像は、その人の過去に連っている教育の集大成であるとする。このように考えると現学生像がある基準にてらして不満足ならばその教育を変えて満足するようにしなければならない。

胎児は胎内に居る時から外界の影響を受けるといふ。このことが事実とすれば、乳幼児期に外界から受ける影響も相当なものであろう。又日本には、「三つ児の魂百まで」という諺もある程である。故に乳幼児期の体験は、人格形成に重大な影響を与えることになる。

小学校低学年の児童が帰宅しても母はパートに出で不在というようなことでは、児童が情緒不安定になったとしても児童の責任とだけは言えなく、その家庭にも責任があり、又この母がパートに出ることが止むを得ない事情によるならば、社会にもその責任の一端はあることになるであろう。

小学校高学年になると、ほとんどの児童は塾へ行く。小学校だけで十分に教育することは出来ないものだろうか？ 塾での竹刀で叩かれての教育に父母は満足しているようだ。学校で竹刀で叩かれた場合は、すぐに父母は教委へ提訴するようである。

中学校から高校への進学については中学校自体で選別されるので、生徒の自主性は相当圧殺され、コンプレックスが残る。高校では社会生活をするための必要最小限の知識技能を授けるものと考えている。然るにその実が上がっていない例が多いようである。以上不満な点を羅列したが、この対策は、戦後提唱された「考える教育」以外にはないのではあるまいか？

これを実現するには、つぎの事項を実行することが必要なのではあるまいか？

- 1. 乳幼児期、小学校期は家庭教育を充実重視する。
- 2. 「やる気」のある、教える「物」を持った先生の養成と、この考え方をつぶさないような管理と組織

を作ること。

3. 大学入試方法、あるいは制度の改善。

4. 先生は工場労働者とは異なるという認識の徹底。

妄言多謝。 以上

## 波らんに富む人生を 振り返って



電気工学科  
教授 佐土根範次

紀元2600年（昭和15年で支那事変は始まっていたが、まだ平和な戦前の頃）浜松でテニスを楽しみながら学生生活を送っていた小生は、昭和16年3月卒業と共に当時の通信省電気試験所第1部（主として電気計測）へ就職した。そこで初めに与えられた課題は白金ロジウム熱電対の焼純効果、二本の熱電対の高温再結晶による熱起電力の変動の問題であった。一人前の電気技術者になろうと希望を抱いていた小生にとって、二本の熱電対が相手ではいささか物足りなさを感じ、将来への希望が持てないのではないかと非常に悩んだものである。1年もたたないうちに大東亜戦争が開始された。

その当手を振り返ってみると、我々の年頃はまるで大東亜戦争のために生まれてきたようにも思えた。陸軍技術候補生の試験にパスしていたので、一ヶ月間一ツ星の初年兵としての全く人格を無視(?)した訓練（今では懐しい思い出である）を受けた後、幸に陸軍兵器学校へ入校することができた。ここは大学と専門学校の理工学系出身者ばかりの集団で、人間尊重の訓練を受けることができた。中隊長である指導教官からは、佛教でいう「我執を去れ」という精神訓話を聞かされたものである。当時は「悠久の大儀に生きよ」という言葉も度々使われた。この兵器学校での教育と初年兵教育を比較してみると天国と地獄の違いがあるようにも思えた。

卒業任官と同時に北満の海拉爾にある野戦自動車廠へ赴任を命ぜられた。そこにおける1年間で、特に冬の零下45℃という厳しい気象条件を体験した。防寒服に防寒帽で身を固め、戸外での元旦の儀式に参列したときなど、眼だけを出して風に向かっ

たときには涙が凍りかけ、上下のまぶたがくっつきかける。体質で血行の悪い兵隊さんなどは、油断すると手足が凍傷にかかる危険性もあった。

1年を過ぎて昭和18年3月には、選ばれて南方作戦に参加することになり、新京で部隊が編成され、釜山から6隻の中型輸送船で潜水艦攻撃をさげながら南へ下り、約2週間かかってパラオ諸島コロール島へ無事到着した。北満と全く違った半そで・半ズボンといった軽装で、早速当時まだ空襲もないコロールの町を歩いた。寒さに鍛えられて皮膚の毛穴がしまっている私達はちょっと歩いただけで玉のような汗をかいた。30℃以上の気温に順応していない証拠である。20代で若かったせいもあって1週間もしたら常夏の環境になじむことができた。我々の属している第17軍の第1線部隊はラバール、ニューギニア、ガタルカナル島で戦っていた。これら第1線の激戦の様子は、中日新聞の夕刊に「ソロモンの残照」と題し約4ヵ月にわたり連載されている。まもなく第17軍野戦自動車廠はこれらの激戦地ニューギニアへ前進することになったが、その時私はA型パラチプスにかかり入院していた。親切な軍医殿に引止められてパラオに残留することになり、この地で第1線への自動車、燃料の補給業務を担当した。このパラオ諸島には本島と、ペリリュー島とアンガウル島があり、我々のいた本島を残して他の島は苦戦の末玉砕した。自分が何処の部隊に、あるいは第何大隊に属しどの島を守るかによって生死がきまるようなもの、これも運命であろうか。終戦を迎えるまでに、ジャングルで破裂した投下爆弾により戦傷を受けたものの幸に九死に一生を得て無事帰国することができた。

内地の土を踏むことができた喜びは嘘えようもなく、間もなく戦傷の痛手は消えたが、戦後の復興の見透しがつかず、新たに会社勤めができるわけでもないで、結局古巣の電気試験所へ復職することになった。当時生きてゆくためには、食糧増産に関する研究しかなく、甘藷苗の電熱温床に関する研究や甘藷の電熱貯蔵に関する研究を始めた。戦前つまらぬと思っていた二本の電熱対が、これらの研究で大いに役立った。これが縁で農林省農業技術研究所とも知り合いとなったが、ちょうどその時期に冷害による米の不作が問題となった。この原因の一つに、太陽からの日射量の不足があげられ、農業技術研究所の技官とタイアップして農試電試型日射計を開発することになった。この日射計が冷害を起こした各

地の農事試験場で大活躍をし、今でも重宝に使用されている。最近では太陽熱利用の研究に使用されている。戦前若気の至りで、つまらぬ研究と思っていた熱電対が、私の研究開発に掛け替えのないものになるとは、赤面の至りと反省している。

この日射計に感度の値をつける必要を生じ、大型黒体炉を使用した熱放射標準の確立に関する研究が私の本命となった。その後紫外線・赤外線の日射計とその応用に関する研究、測光に関する研究へと進み、照明計算の問題に続き、温度計測や電熱応用に取り組んだことが縁で、省エネルギーの一環である照明と空調の熱的結合方式の研究へと進むことができた。当大学に勤めさせていただいてからは、太陽熱利用冷暖房の研究にも発展してきている。

最初はずつらぬと思いついていた研究や開発の仕事も、恩師や先輩からの適切な指導を受け、同輩、後輩の協力により、意外と進展することもある。

歩んできた人生は波に乗ることもあるが、意のままにならずスランプに落ち入ることもある。このような時こそ辛抱と忍耐と努力の積み重ねによって道を切り開くことが必要と思う。

欲求不満とまではいかなくとも、満たされない生活や仕事をしてこそ、努力、勤勉、向上があり得る。研究開発をしている人は、I am hungryでなければならぬ。そこからアイデアが生まれてくる。とはよく言われたものである。木曜日の夜NHKで「この人」を演じている、2番目に紹介されたプロ野球で有名な川上哲治氏は、hungry sportsをモットーに体を鍛え、腕をみがいたという。

恥かしながら私の歩んだ道をさらけ出してしまった。何らかの参考になれば幸である。



### 建設工学科の現況



建設工学科

教授 河内陸雄

卒業生諸君！元気で活躍のことと存じます。月日の経つのは早いもので、私が大同工業大学に赴任して10年、建設工学科ができ1回生が入学して以来8年になりました。したがって今年3月第5回の卒業生が巣立ち、建設工学科の卒業生は土木系394名、建築系535名となり、各職場で頑張っておられます。

諸君たちのおかげで、昨年度の求人は、総合建設会社126社401名、土木会社127社244名、建築会社160社251名、コンサルタント22社42名、設計事務所7社18名、総計442社956名の多きになりました。

建設工学科のスタッフも充実して、教育と研究にはげんでおります。現在のスタッフを紹介しましょう。

- |     |       |     |       |
|-----|-------|-----|-------|
| 教授  | 河内陸雄  | 教授  | 小宮賢一  |
| 教授  | 橋本香一  | 教授  | 石丸健雄  |
| 教授  | 石綿知治  | 教授  | 石黒徳衛  |
| 助教授 | 事口寿男  | 助教授 | 渡辺雅生  |
|     |       | 助教授 | 五島利兵衛 |
| 講師  | 桑山 忠  | 講師  | 太田福男  |
| 講師  | 久保田 稔 | 講師  | 笠嶋 泰  |
| 講師  | 舟渡悦夫  | 講師  | 稲垣卓造  |
| 講師  | 水沢富作  |     |       |

助手 浦山益郎  
助手 佐藤達生

なお、今井正次先生は三重大学建築学科助教授へ、今西(松田)由利先生は御家庭の御都合で退職、谷口元先生は名古屋大学建築学科助手へと転任されました。

現在の在學生は4年次178名、3年次262名、2年次211名、1年次168名、総計819名で、相変わらず高校生には人気があるようです。

風の便りによりますと、一級土木施工管理士、一級建築士の国家試験に合格された人も相当いると聞いております。初心を忘れず、たゆまず努力し、経験を知識と生かしつつ頑張ってください。

また、諸先生の話では、よい伴侶をみつけて結婚された方もいるとか、健康に気をつけて、いつまでも幸せになって下さい。



## 会員だより

### オーストラリアでの 2ヶ月



アイサク鉄工 K K

62M

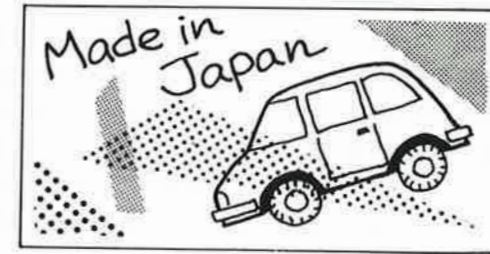
佐藤 洋

オーストラリア大陸の南に位置するメルボルンへ昭和57年8月末より2ヶ月余、会社より派遣されて行った時の現地での印象、体験を書くものです。

仕事は日本の大手自動車メーカー、オーストラリア工場板金プレスライン増設に伴い、我が社が受注した付帯設備(素材供給、成形品取出装置)の据付監督と試運転立合いでありました。この工場は数年前より稼動しており本社よりの駐在員も15名で生産管理に従事してみえました。工場建設、生産に当って本社より大勢の方々が幾度も行き来し、且つ現地従業員の中にも日本での研修を経験された方が多く仕事の面では何の不安もありませんでした。しかし生まれて初の国外、しかも一人旅、おまけに飛行機初体験とあって出発前日(8月23日)は心穏やかざるものがありました。

成田空港を立ったのは午後8時30分、眠られぬ一

夜を機上で過ごし夜明け頃にはオーストラリア大陸上、シドニーで乗り換えメルボルンへ、入国時税関で少々絞られた後迎え人の顔を見てほっとしたものでした。空港からメルボルン市街(CITYと称する)への車中、多少感情の高ぶりを抱きつつ入れ替わる景色に目を向けていました。牧場か空地か判らぬが平坦で広大な地形、横文字の標識、看板と違いはあっても人の住む所に大差はなく何の違和感も起こらない、車が小型で日本製が多かったためでもあろう。かなり旧型(40年型)の物が走っていてしかも外観



の手入れはしてなく汚ない、車に対する観念は日本と大分違うようだ。手入れ嫌いの自分には親近感が湧いてきた。宿泊はMOTELと称する所で日本のビジネスホテルに似た宿で部屋が広く(12畳くらい)管理人は年配の婦人が一人のみといった所に違いを感じた。ちなみに部屋代は1日20ドルで建物が古いためか安い方とのこと、朝食はMOTELで毎日パンとバター、ミルク、オレンジジュース、果物(缶詰より出した物)が部屋へセットされ昼食は会社の食堂、夕食は外食であった。

工場は市街より南へ約12km、途中港の入口に掛かった有料の高架橋(WEST-GATE-BRIDGE)を渡って通る高速道路(FREE-WAY)でMOTELより約20分かった。工場の周辺も平坦で以前は放牧場であったのか周囲には何頭もの馬が放たれていた。設備の据付は粗方済んでいて直ぐ始めることもなく毎日工場内を見て回っていた。隣の既設ラインで生産している模様を見ようと近付くと現地人が好奇の目を向ける、陽気な顔で何やら声を掛けてくる。日本では全くない対応にあい外国人に接した経験のない自分は一瞬とまどいを憶える。英会話力に乏しい自分にとってはうるさくもあったがそんな気持ちも直ぐに消え、こちらから話し掛けるようになった。見知らぬ自分に見せる人懐っこさ、愛嬌は日本では考えられぬことだ。今日の日本で見られる空しいばかりの人間関係を思い、来て良かったと思う毎日が続いた。現地人従業員は多人種で英国、中国、ドイツ、イタリア、インド、フィリッピン等様々で英語に弱いのは自分ばかりでなかった。仕事をする上で感じた日本との大きな違いはまずスローペースで残業なし、生産量が少ないためあろうが仕事は今日のみならずと云った気がした。次に業務の範囲が明確で

決められた仕事以外はせず、手助けをしてもそれは他人の仕事を侵したとクレームがつく始末、UNION(労働組合)の力が強いらしい。暇で掃除の手伝いでもと思ったら掃除係の男(日本では下請けで年配者が多いが向こうでは働き盛りの男子)に拒否される。職種に依る給料差は日本と違いは無いが仕事量に拘わらず単純労働(物の出し入れ、鉤操作のみ)ほど低く前述の掃除係とか給油係といった人がその類とのこと。でも彼等は自分の能力に合った仕事として満足し、努力してでも上位の職へ登ろうと思わ

ぬそうです。努力はともかく満足しているかどうかは疑問に思った。いずれにせよ生産性向上には暫く時間を要するようで持てる国と持たざる国の違いもあろうが仕事で胃を痛めることなどないであろう。自分も毎日の快適さから確信

がもてた。

週休2日制で土、日はゴルフが主、コースの数も多く大半はパブリックコースで1ラウンド千円程度で済みゴルフ好きな者にとっては天国である。ただしセルフサービス、子供から年寄りまで本当にゴルフを楽しんでいる様子を見て感心する。休日の楽しみ方もジョギング、サイクリング、屋外バーベキューとか家族ぐるみの行動が多い、金の掛かぬ遊びかと思えば、クルーザー、ヨットで楽しむ人も多く本当の姿はよくわからない。住まいは煉瓦やブロック造りの白色平屋がほとんどで敷地は広く周囲は緑がいっぱい、彼等は過密な日本の住居を見たら窒息するのではと思われる。

食べ物は肉類、魚貝類、果物と豊富だが味つけはやはり日本に勝るものはない。従って外食は日本食レストランに行くことが多く米飯がやはり日本人にとって一番だ。会社でも米飯は時おり出るがとても飯といったものではなく(細長くばさばさ)現地人でも食す人は少ない。これでは本当の米飯の良さは判らぬ。一度日本の米を食べさせてみたい気持ちになる。観光は本社よりの出張者との協同生活、一人歩きの不安からメルボルン近郊のみ、広大な土地故見たい所は多いけれど土、日の2日間ではとても無理だった。でも大へん有意義な2ヶ月であった。帰国して早5ヶ月が過ぎ大陸的気分も薄れただしくしている昨今、今度の寄稿でオーストラリアでの2ヶ月を懐かしく思い出した次第です。

### 特許情報の活用

西郷国際特許事務所  
所長・弁理士



65M

### 西郷義美

工業所有権制度は、創作者が完成したところの自然法則を利用した技術的思想の創作を、文書化して出願させ、出願公開制度、出願公告制度等により公開し、技術界に再環流させ、技術の累積的進歩の基盤を引き上げる役目を果している。

特許情報による特許情報は、権利的性格を有する一面と、技術的性格を有する一面との二面性を有する点で、他の技術情報と異なる。

また、特許情報の大きな特徴として、当該時代の広範な分野の技術の全てを包含している点にもある。しかも調査によるとこれら特許情報の約95%は、特許情報以外の文献には掲載されず、このため特許文献を利用しなければこれらの技術情報を見逃してしまうこととなる。このようなことから特許文献は技術情報の宝庫といわれる。

特許文献、特に公告公報は審査官による審査が済み、特許権付与を前提として発行されるものであり、技術内容は一定水準以上であり、質が高い。

また、重要な技術は、一般に自国のみでなく、外国へも出願（外国出願）される傾向にあり、この外国出願は、その国の公用語に翻訳され、公表される。このため、日本人は日本語でこの外国からの新技術内容を読むことができる。しかも、工業所有権に関するパリ条約により、有利な取扱期間が6ヶ月あるいは1年と定められているので、最新技術を掲載した文献の入手可能時期も比較的早い。

さらに、これら特許文献は、当該国より永久保に管され、文献の活用に便利なように特許分類が付され、公衆の閲覧に供される。そこで、特許文献を利用せんとする場合は、特許分類表により目ざす技術分野の分類番号を知ることにより、迅速確実にその分野の技術文献に接することができるのである。

特許文献の十分な活用によって、各分野で活躍中の同窓の皆様が更にアップされますよう強

く願っております。

### 私とコンピュータ

大同特殊鋼(株)高蔵製作所 情報システム部

66E 名倉満雄

私にとってコンピュータは飯の種である。と言っても飯より好きという訳ではない。仕事の上で長くつきあっているにすぎない。最近のコンピュータの爆発的發展を見ると人類にとって良いことなのかという疑問を禁じえない私にとっても、つきあい難い物になりつつある感が強い。また人間は本来野性の生物であるのに電子化の道を急いでいる。人間の血・肉・骨が、シリコン・光ファイバー・プラスチックに置換するのではないかという錯覚さえおぼえる。

さて、私が初めにコンピュータと接したのは、本学在学中であった。大学のついでで東芝のFORTRAN講習会に同寮5名で参加し、電気の岩間先生の名前



で東大・京大の計算センターを利用させて頂いた。計算のテーマは私の趣味の一部で結晶計算であった。学業とは全く無関係なので遠慮しながら、かつ大胆に名大に度々行っては、カードのせん孔をしたものだ。やはり計算の早さにはビックリ。前は手回タイガー計算機や物理学教室のリレー式計算機を回して、日が暮れたものだ。

そんな経験が原因してか、大同製鋼（今は大同特殊鋼と改名）に入社したら事務機械室（今の情報システム部の前身）に配属された。新人社員教育で本社のコンピュータを目のあたりにした時は身も心も縮む思いであった。何しろ本物のコンピュータを肉眼で見たのはこの時が初めて、操作員の動作たるやまるで神技としか見えなかった。大変な職場で私ごときに心底つとまりそうにないという恐怖感で一杯

であった。その操作パネルは、プログラムが実行する番地とその内容を表示しながら、めまぐるしく点滅していた。操作員はこれを見ながら、三本の指でビット単位にデータを入力し、コンピュータに次々指令を与えている。これが大変スピーディで恐ろしく真剣で気合の入った光景であった。

入社教育が終了してよいよ本番、知多工場に同期と2人で配属となった。歴史の浅い部門である。その折は課の平均年令を引き上げるのに大変貢献し、上から数えて5番目（課員は20名位）であったかと思う。みんな、最先端の職場と平均年令の若さで、いつもワイワイ、ガヤガヤ、キャーキャーといった歓声とともに仕事をし、会社とは何と自由で楽しい所かと思った。それはつかの間、何も知らない私に恐怖の業務システムの運営がまかされた。当時のシステムはすべてアセンブラで書かれていた。アセンブラを知っていても、読むことは大変困難で、システムも未熟（誤りが多い）であった。毎日決められた時間になると、担当システムがコンピュータで処理される。何しろ、まともに処理が進むことはなくどこかでコンピュータがストップし、操作員から私を呼ぶ声が聞こえてくる。何もわからない私は先輩をたよってただオロオロするばかり。先輩が休んだりすると恐怖は極に達する。担当システムは他の重要なシステムにソースデータを提供する役割を担っており、うまく行かないと、他システムが処理できないばかりか、誤った生産指示をしかねないのだ。

そんなこんなが過ぎて、今は高蔵製作所勤務である。入社以来、早くも13年もコンピュータとつきあい、いささか片輪者の烙印をおされつつある。紙面の都合で社会人一年生頃までの話にとどめたい。4年位前から、長くやってきた事務処理系の担当から技術計算系の担当になり、高蔵製作所設計部や、中央研究所の方々のコンサルテーションや有限要素法等の大規模技術計算処理にたずさわっている。私は本学に技術を学び育ったこともあって、技術計算分野に興味がつきない。微力ながら、みんなから喜ばれるシステム作りに力を注ぎたいと念願するものである。

### 学生時代をふりかえって

江端歯科技工所(自営) 68M 江端宜和

大学を卒業して、もう11年になろうとしています。ほんとうに早いものですね。こうしてペンを取り、

学生時代のいろいろな出来事を思い出すと、なつかしきでいっぱいになります。アーチェリー部の合宿で白馬村に行った時、当時一年生の僕達と2年、3年、4年の合同軍（当時のアーチェリー部は1年が7人いましたが先輩が2、3、4年あわせても7〜8人でした）と試合をすることになりました。そしてその試合に負けた方がその晩の夕食の仕度とあとかたづけをすることになったのです。僕達1年生は日頃こきつかわれている先輩たちに一泡ふかせてやろうとその試合に必勝の覚悟でのぞみ、ついに勝ってしまったのです。その晩の夕食で先輩達がみじめな顔をして僕達がふんぞりかえっているテーブルに夕食を運ぶ姿を今でもはっきりと思い出ことができます。ほんとうに楽しい思い出です。先輩たちには悪いけどね。



そのころ、私の父が鑄造会社を経営していた関係で将来会社をついでやっていくつもりでしたので横井先生ご指導のイモノ研究室（イモ研）にも1年生の時から出入りさせて頂き、いろいろご指導頂きました。ところが卒業後ドルショック、オイルショック等の影響で、父の会社の将来性に疑問をもち、別の道を歩むことになったのです。その別の道とは、歯科技工という仕事です。この仕事は簡単に説明しますと、歯科医の注文でいろいろな口の中の補綴物（義歯など）を製作する職業です。歯科技工士は国家資格が必要で2年間、技工士学校へ行かなければ資格は得られません。そこで大学を卒業してもう学校には縁がないと思っていた私にまた2年間の学校通いははじまったのです。生来、不器用で器用さを必要とするこの仕事に私はあまり向いていないことは始めからわかっていたのですが、この仕事の大部分が精密鑄造という工作法でつくられるときいて、大学時代「精密鑄造に対する新しい試みに関する研究」という卒論を書いた私にとっては、何か因縁めいたものを感じ、この道で一生やっていこうと決断しました。

現在、私は名古屋の金山に「江端歯科技工所」という会社をやっています。スタッフは10人いまして、愛知県・岐阜県・三重県下の30ほどの歯科医院から仕

事をいただき、微力ながら歯科医寮の一翼を担っています。機械工学科をでてこんな畑違いの仕事をして、とんだ遠回りをしたものだという人がいるかも知れませんが、私は大同での4年間が決してムダだったとは思っていません。イモ研やアーチェリー部の活動がどれほど私の人間形成に影響したかわかりませんし、鑄造の勉強をしていたことが歯科技工に充分役立っているのです。生意気なことを言うかもしれませんが大学という所は知識を得るために行く所ではなく、新しい時代に十分適応できる基礎力を身につけに行く所であると思います。つまりすぐに役に立つような知識のみをいっばいにつめこんでもすぐに役に立たなくなるということです。それよりも、どのような新しい技術が出てきても基礎的な学力(例、熱力学・流体力学・水力学等)を身につけてさえいればすぐには役に立たなくても将来必ず大きな実を結ぶことになると思います。社会に出て痛感することですが世の中を動かしている人というものは凡人とどこが違うかという、それは創造力・実行力・人間的魅力の3つであるように思います。それにはあの自由な雰囲気大学生活がそれらを身につけるには最適な場所であると思います。こんなことを言う自分も大学4年間を今、思い返せば失敗の連続で、もう一度学生として自分を鍛えなおしたい気持ちにかられます。

最後に時々思うことですが我々の大学は確かに、東大や京大に比べれば、レベルは低く、頭の優秀な学生は少ないかもしれませんが、それを恥としている同窓生が私の回りにも少しいます。ただそれはまちがっていると思います。人にはそれぞれ持って生まれた素質というものがあり、それにそって一生懸命努力すれば、その人の人間としての価値は東大生でも大同工大生でも同じはずです。法学の井塚教授がある日の講義の余談で次のような意味のことを言われ、私は感動したことを今でも覚えています。「大宅壮一が、日本に大学が多すぎることを批判して駅弁大学という言葉をつくったが、この駅弁大学の卒業生が今の日本を築くのにどれだけ力になったかということを考えてみなさい。我々の大学も駅弁大学の一つかもしれないけれど、優秀な学生は少ないかもしれないけれど、日本の発展、人類の発展に微力ではあるかもしれないが寄与することはできるはずだ」私はこんな立派な先生がたくさんおられる大同工業大学を卒業できたことを誇りに思っています。

## 私の卒業後の生活

岩岳スキースクール(冬期)  
横田木材株式会社(夏期)

68M 梶 義広



私は今、長野県北安曇郡白馬村岩岳に住んでいます。北アルプスのふもと、夏は白馬岳・唐松岳の登山等、冬は多くのスキー場がある観光地です。

今ではスキー歴14年のキャリアがありますが、初めて大学からスキーに行ったのは2年の時で、スキー山岳部のスキースクール(黒岩スキー場、現在信濃平)でした。

技術は中級程度の現地の指導員、大学の先生、先輩、友人達から技術的なことを教えてもらったりしてただ楽しく滑べる1人のスキーヤーでした。

次の年からスキーが人より上達したいと思って自分から大学の先生、職員、先輩、友人達をさそってスキーシーズン30日以上滑べるようになりました。

そんな頃になると、1年中スキーがしたくなり、4年生の後期を休学し八方尾根スキー場にパトロールとして働いて1シーズン過ぎました。5年生のときなんとなくスキーをして卒業もできなくて6年生になってしまった。今年こそは卒業しようと思っ頑張って卒業(昭和49年3月)することができ、またその年に愛知県スキー連盟の準指導員検定を受験し

合格することができた。

大学生生活を考えるとただスキーをするためにアルバイトをし、スキー技術の上達だけを考え学校に通っていたとしか頭に浮んできません。卒業後就職先では社長(スキークラブ会長)がスキーに対して理解のある人だったので、最も自分が望んでいた条件の会社に勤めることができたのは幸せだったと思います。

普通のサラリーマン生活を体験したことのない自分が悩んだことは、結婚し子供が生まれ名古屋から実家(富山県氷見市)に引越して生活した半年間です。今まで冬はスキー指導の仕事しか経験がなく普通の人々のような生活にはもどることができず、冬が近づくと仕事も手につかなくなり、スキーができれば良いという身がってから後先のことを考えずに家族を連れて岩岳スキー場で生活するようになって3年半になりました。

今では、自分の希望通り岩岳スキースクールの指導員として毎日充実した生活を送っています。

“岩岳スキースクールの心得”

スキーについて知恵を出せ。

知恵の無い者は汗を出せ。

知恵も汗も無い者は、

静かに去れ!

この心得をスキーだけでなく人生の心得として生活するよう頑張っ生きていたいと思います。

## 思うままに



岐阜県総務部管財課  
69M

坂田洋一郎

十年一昔と言いますが、卒業して早や10年が経ってしまいました。

同窓生の皆様、そして諸先輩方、いかがお過ごしでしょうか。月日が経つのは早いもので、私も知らない間に30歳を過ぎ2児の父親として責任を感じつつ平凡な生活を送っています。

毎年このの時期になりますと、卒業を迎え希望と不安とが交互に入り混じり、学生生活に未練を残しつつピッカピカの社会人1年生としてスタートした頃

のことが思い出されます。

ボーナスを全てスキー用品に遣ってしまった1年目、そして柳ヶ瀬に狂った2年目、スキー用品が古くなったからと言って買い換えた3年目、と遊び心一杯の日々でした。そして現在1人前の技術者として仕事を任せられ、10年選手としてサラリーマンの悲哀を感じ、平和な世の中にあぐらをかきつつ日々を過ごす毎日です。

現在は、空調衛生工事の仕事に携わっています。昨今の技術革新は目ざましく、波に乗り遅れることがしばしばです。ほぼ1年、短いもので数ヶ月の周期で革新研究されつつあり、特に省資源、省エネルギー、耐震借置等が打ち出されている現在、ソーラーシステムの導入、機器の効率向上、建物躯体の断熱等多方向から検討実施されつつあり、熱源エネルギーの収支バランスを改善するような研究、指導が成されています。

又、時代のニーズに応えるべくコンピューターの導入、高度医療に対応すべくバイオクリーンルーム試験研究機関、工場等から排出される排液処理技術等、専門分野の細分化が行われており、自分の専門は別として、ある意味で広く浅く知識を把握し、トータルとしての技術者像が要求されるようになったと思います。

空調衛生の分野は時代と共に重要視されつつある現在、物理学、化学、数学等多方面の集合体でありなかなか経験だけでは困難な事柄が多く、今さらながら勉強の必要性を痛感させられる今日この頃ですが、仕事場では雑務に追われ、家に帰れば晩酌、テレビ、となかなかです。

最近、物事の価値感の評価というものが人によりこれ程異った時代はめずらしいかもしれません。ありとあらゆる物欲が満たされる今日、物理的、物質的解決を急ぐあまり、淘汰されてゆく事柄が多いのも特色かも知れません。

私の子供も、やがて反抗期を迎え成人する日が、嫌がおうでもやって来ます。このような中で私の受けてきた教育をそのまま彼等に受け継がせてもいいのかどうか不安を抱く今日この頃です。

## 就職してはや4年

五十鈴製作所 75M 高見和宏

季節めぐりて、早や春を迎える頃となりました。同窓生の皆さんには、益々御健勝のことと、お喜

び申し上げます。

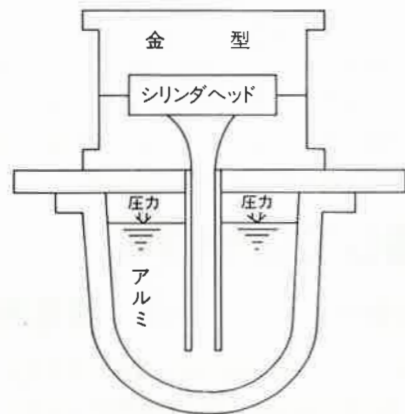
皆さんは、各職場で先頭に立って責任のある仕事に、精進されていることと思います。



私は碧南市の五十鈴製作所に勤めています。もう4年にもなりました。会社勤務は、いえ社会はなかなか厳しく冷たいものです。どうやら学生時代のように甘くないようです。

今、私は業務事業部・設計課に所属しており、主に低圧鑄造機の設計をしています。皆さんは低圧鑄造機とは何だろう、聞いたことがないと思われるといけないので、肩のこる話で恐縮ですが、少し説明します。

皆さんは、自動車のエンジンならよく御存知でしょう。そのエンジンのシリンダーヘッドを作る装置なのです。図に示すように、保温炉に入った溶けたアルミを上部の金型へ圧力をかけて、押し上げ鑄造するのです。



お分りいただけでしょうか。

私は、自分で設計したものが、ひとつの装置となり商品になることを思うと、喜ばしく価値のある仕事だと思います。

困ったことや、むずかしいことに出合った時は、幸いにも先輩の同窓生が相談にのってくれますので、とても助かります。つらいことも多いですが自分の修養と思い頑張っています。しかし忙しい中でもテニス、ボーリング等遊びにも積極的にやっています。冬には必ずスキーに出かけます。

これからは、量より質の時代であると言われていきます。私も自分の知識を深め、また心を磨き、時代にマッチした人間になることが、これからの社会に生きのこるコツだと思います。

それにしても、同窓生との結びつきを、ますます強くし、お互いに協力し合い助け合っていくことが、一番大切なことと思います。

### 現代の「うさぎとかめ」について



中部トヨタリフト(株) 77M 平田豊成

皆さんも「うさぎとかめ」の話は少なくとも一度や二度はお聞きになったと思います。私もほど小さな頃この話を聞かされました。足の速いうさぎが到底追い付けそうもない足の遅いかめに負けてしまった話です。ここに出てくる主人公(?)のうさぎはぜったい自分が負けないと過信したため途中で居眠りをしてしまい最後までこつこつと歩き続けたかめに最後は追い抜かれてしまった訳です。

この話で私が学んだ(少し大袈裟ですが)ことは、どんなに優れた才能を持っていたとしても努力して最後まであきらめずやりとげたものの方が成功するのだということです。

新聞かなにかだったと思いますが、おもしろい記事が出ていました。現代の子供はこの話をこのようには受け取らないのだそうです。今の子供たちは居眠りをしているうさぎを尻目にひたすらゴールを目差

したかめにどうしてこの時一声かけてうさぎを起こさなかったのかと少なからず疑問を持ち、むしろかめの批判をしていました。

私はこの問題がどうのというのではなく、考え方がおもしろいと思うのです。物事を多角的に見つめればどちらの考え方も成り立つのです。ルールに乗っ取り考えればありふれたことがまったく正反対の答えになってしまいます。すなわちこれも一種の発想の転換だと思ふのです。

私は営業というセールスの道に入り、しきりと発想の転換を図れと言われてきました。今の経済は需要と供給のバランスが供給に傾き、物があふれる傾向にあります。以前のようにバランスがとれた、作った物が売れるといったことはあまり期待出来なくなってきたのです。よって物を売るセールスの仕事はますます多く、広い分野へと広がり企業として今後強化しなければ経営が成り立たないといった時代に入ったと思います。

今の時代は技術が上ばかりでなく横にも広がったおかげで、戦後のテレビや洗濯機といったような超ヒット商品は生まれにくいと思うのです。もともと人間の生活というものが自体そう大きく変化するものではありませんから。すなわち少ない需要で多くの供給者があるわけですから販売合戦が起こるのです。現実に今の景気だと物がなかなか売れません。私たちとしてはこれでは困ります。どうすればよいか、あるものは価格を下げてどうにか売ろうとします。しかしこれは急場凌ぎでしかありません。今の価格構成はそれほど単純ではありません。するとどうしても売り方を変える必要が出てくる訳です。それは今までの商売の方法をまったく方向転換させるということではありません。あくまでも正攻法に乗っ取り今までの発想を一つずつ検討していくのです。ほんのちょっとしたことでも相手のメリットになるといったことはまだまだ沢山あるものです。

今まで発想の転換について述べてきましたが、今度は情報についてお話ししましょう。就職というと企業としてはよりよい人材をとというのがもっぱら選抜の基準となっていますが、近い将来、より多くの「コネ」を持っている人間が優遇されるといった記事を見たことがあります。少なからずあたっては私も思います。ここでいう「コネ」とはまさに情報のことなのです。地球の裏側の出来事がある日のうちに伝えられるといった広い意味での情報も大切

ですが、もっと身近な情報に耳を傾けてください。すばらしいものがあるはず。時に自分の一生を左右するものもあるかもしれません。情報は何かから生まれてくるのでしょうか。それはやはり人間が主体なのです。

私は、皆さんにより広い友達を持つことをすすめます。多種多様な友達、学生であれば社会人を、社会人であれば自分とはまったく異った仕事をしている人といった具合にです。

そして最後に情報とは一方的に受けとめるべきものではないのです。お互いに発しながら自分からも見い出せるものでもあると思います。

情報化時代といわれている現代私たちにもっとも有益な情報を生み出してくれるものは私たちをとりまく人間なのです。

人間の生命でさえ金に換算出来る時代ですから何もかも金で買える時代なのかもしれません。いくらそんな時代でも心の豊かさだけは別だと思ふ。発想の転換だとか情報だとかいう前に、多くの人間的つながりの中でより広い心のアンテナを伸ばし人生を歩めたならばこれほどすばらしいことはないと思ふ私は思ふ。

### 「56豪雪」を体験して



丹生郡清水町役場 建設課 75C

田中忠夫

時の流れは早いもので職について4年が過ぎようとしています。又、専門である土木の分野の仕事に就職できたことは幸福でした。

さて、私の仕事は一般土木以外に特殊なものがあります。太平洋側の人々には想像もつかないもの「雪」。これを取除く仕事です。

降り方次第では風流とも言えるでしょうが、これが過ぎれば、地震、台風同様に、大災害になりかねません。

ちょうど2年前の「56豪雪」はまだ記憶に新しい言葉でしょう。一晩に60cm~70cmの雪が降り、こ

の状態が2週間以上続くのです。  
 道路の両側は雪の壁、約2mはあったでしょうか。信号機、道路標識等は折曲がり路面に散乱しておりました。もちろん建物、交通機関に与えた被害は莫大なもので、死傷者も数名でたほどです。

こういった中での除雪作業は困難を極めました。除雪作業は、前日の夜に明日の計画を立て、早朝2時30分ごろ出勤します。先ず幹線道路を優先的に、続いて支線へと進めます。道路附属物(ガードレール等)にはあらかじめ目印を付け、作業オペレーターが確認できるようにしてあります。当時はその目印さえ隠れてしまいどこに何があるのか見当もつかない状態でした。そのため物損事故が多発し効率は低下する一方で、一日かかって幹線2~3km程度広げるのが精一杯でした。

以来、私達は、「雪に強いマチづくり」をスローガンにして、雪害防止運動を推進してまいりました。又、更にこれを足掛かりにして、官民、住民同士のコミュニケーションを一層深め、人間味のある町づくりを目指しております。



(株)大林組 名古屋支店  
 77A 川本光子

早くも入社して3年目を迎えようとしています。そして、今年からは念願の現場です。とはいえども、今までのような、何となく図面ではまずいので、これを機会に新入社員のつもりで仕事に取り組んでます。

又、それ以前は、「大同工業大学滝春校舎新築工事」のお手伝いもさせて頂き、本当に恵まれた仕事ばかりだと思っています。

自分が手伝ったと言うだけで、その建物が完成してゆくのをしていると、さも自分が造ったような感動を覚えるのですから不思議です。また、そんな感動が建築屋の魅力ではないだろうかと思っています。

最近、新聞を読んで感動したものを紹介します。  
 瓦ふき職 岡山市に住む53歳の女性

この世界で17年、ある時は「女だてらに」と言われたこともあった。又、「よう女でやるは」と驚きの目で見られたことも、しかし、「女にできんことをやらせてもらって」とこの仕事に限りない喜びを見い出して今日まで頑張ってきた。

屋根の上が職場、冷たい風は身をきられるほど厳しい。「本当に冬は寒くてシンドイわ。というて夏は夏で倍の暑さやし……。ま、何の仕事でも同じじゃろうがな。」明るく日焼けした顔をほころばせる。「最初は、足が震えてしもおて、よういかんかったなあ、それが今では両手に重い瓦を持って勾配の急な屋根の上をヒョイヒョイ、男じゃろうか女じゃろうかと言われるんじゃけど。やっていかにゃあ食べてけれんし、男の人にできるのに、女にできないわけはない」と負けん気は人一倍強かった。

「上るるのはええが、下る段になると怖うて怖うて」屋根の上は滑る。落ちないように足を突っばる。ももらふくらはぎがパンパンに張り、緊張の連続で肩も凝り、家に帰った時はグツクリ先輩の一つ一つ教えられながら覚えていった。仕事はつらいと思ったことはない。

今では、社長の片腕として活躍し、現場の総責任者。屋根に上がる前の段取りも又、重要な仕事である。まず「地割り」瓦がどれだけ必要か縦と横の枚数を見積る。だいたい許されず一枚の狂いもなく計算違いで屋根の上で立ち往生するようではダメ……

私が現場に出る頃目にとまった記事で、この女性を鏡にして、一歩でも近づけたらと思っています。

つまずくと自分に言い聞かせる言葉に「やり易いところでなら誰でも出来るが、やりにくい世界で懸命に挑戦していくところに、人間としての芯が養われ、やがてどんな困難にも負けない強じんな力を培っていく」

こんな難しい仕事が出来たらどうかと尻込むよりよし！やってみよう。



### 大同工大同窓会 関東支部発足

玩具問屋 宮平商店  
 62M 宮崎定典

兎にも角にも、大同工大同窓会関東支部が、できたことがとても嬉しい。我々もこれで仲間同志の絆連帯感をより太くできれば、生活していく上で、心の寄り所になると、信じます。

第一回同窓会は昭和57年9月19日、東京虎の門・農林年金会館にて行いました。大同工大より浅田千秋学長、新美同窓会々長、杉浦副会長、山田事務局長の4名をお迎えして会を盛り上げて頂きました。今回80名位の方に連絡をとり、43名の所在が分りました。当日18名が出席され総勢22名で昔話に花を咲かせ楽しい一時を過ぎました。これから毎年11月に同窓会を行うことにしました。第一回の準備には、

41M鈴木氏、43M西郷氏、他志水氏、加藤氏、佐竹氏、叶氏、他の方々にも多大な協力で会が成功致しました。それとこの同窓会の発足を心から待ち望んでいられた、故錦織学長、故上森教授、草葉の陰から見て頂けたと思います。又私共卒業以来上京のたびに会をと望まれていた井塚教授に因らずも連絡を忘れてしまい、あとで「手弁当でも出席したかった」と言われ非常に残念で仕方ありません。でも第二回の出席を約束して頂きました。

今回の話し合いで関東支部にいる限り、皆で仕事上、又友達付き合いも、今後活発に行うことを約束し第一回の同窓会を終りました。今後東京及び関東地方に在住なさる方は、関東支部の住所録等ございますので、お便り頂ければお送り致します。

- 関東支部 部長 宮崎定典  
 〒111 東京都台東区  
 Tel <03>  
 副部长 鈴木昌治  
 神奈川県秦野市  
 Tel <0463>  
 副部长 西郷義美  
 東京都江戸川区  
 Tel <03>



### 六七会総会開催に あたって

タナベフォートスタジオ 67M 田辺幹知

時下春暖の候、皆様にはご壮健で何よりのことと思います。開催につきましては、諸先生、学校関係者、又同期の皆様には、御多忙にもかかわらず御出席して頂きまして誠に有難うございました。ま

ずは、報告にあたりお礼申し上げます。  
 さて、我々六七生は、昭和46年に卒業して、早いもので、昭和56年には、10周年を迎えることになり、同期生による同窓会を開催したらどうかという意見が多く出ていました。それまでは、各クラス単位もしくは、グループ単位で年に数回親睦を計るのが現状でした。そこで我々は、同窓会開催を運営する役員会を四ヶ月位まえに各クラス数名均等に役員選出することから始めました。  
 おかげさまで、なんの苦もなく役員を選出には、

皆さん喜んで協力するとの返事で、早々に役員会が週に一度多いときには、週に2度互いの仕事の合間をみつけて、会合なり、案内状作成、住所録作成と進行されていきました。そうしたなかで、運営がスムーズに進行したのは、同期で大学勤務をしている、青山・間崎両氏が事務局として、各役員への連絡及び、資料の作成に協力していただいたことだと感謝しております。

そうした皆様の協力により、遂に六七会が、六月七日(日)に私学共済会館(愛知会館)にて、卒業生220余名のうち、案内状発送者150余名、出席約半にあたる80名出席していただき、我々役員にとっては感無量でした。

当日会場受付では、なつかしい顔が見られ、握手したり、互いの肩をたたきあいそれぞれの表現で、昔をなつかしんでいました。そうしたなかで、誠にこっけいに感じたことは、顔は知っていても名前が

出てこず、こっそりと会場に備えてあった卒業アルバムを見ながら、またもとの場所にもどって楽しく会話をはずませていた友人が多くいました。

そうした盛況のパーティが約2時間、歌あり、ゲームありで、あっという間に時間が過ぎていきました。そして、閉会の辞が終っても、遠方の友人や、急用の友人を残して、だれ1人立ち去らず、司会者の提案で、会場を変え全員そろって二次会を行うことになり早々に退場して行きました。我々役員だれ1人も、ここまでは予測できず、六七会を開催したことには有意義であったことが、言葉で出さなくても実証され、喜ばしく思われました。

次回の15周年同窓会には、同窓生がどのように変わっていくか、楽しみと不安が入り混じり、互いの仕事の協力がより一層強くなることを願望としており、この会をより有効なものにしていきたいと思っております。



**大同技術協会の活動状況**

大同技術協会会長  
(大同特殊鋼・知多)  
62M  
**山野清市**

大同工大卒業生の皆様、ますますご健勝、ご活躍のことと思います。皆様方はいま仕事が一番できるため、日常は多忙をきわめ、最も充実した毎日をお過しのこととお喜び申し上げます。

さて大同技術協会は昭和45年11月、故錦織初代学

長のご提案と故上森教授のご支援を得て、「卒業生が技術を中心に交流し合って、強い組織を作り、自己研鑽する」を目的として結成されました。創設と同時に会員相互の親睦と自からの技術力向上の諸行事として、各種の研究会、セミナーの開催、講演会そして工場見学会等を企画してまいりました。昭和48年には、会員諸氏の技術の結晶とも言うべき第1号協会誌が誕生しました。会誌は毎年発刊が続き、本年3月には第10号記念特集号が会員に届けられています。

協会活動のうち、会員にとって有益となる行事としてまず工場見学会が挙げられます。第1回の「日本陶器株式会社」から始まり、昨年11月の「三菱自動車・名古屋製作所」の見学を含め、13回実施され

**事務局だより**

○名簿の整理をおこないます

事務局では昨年度パーソナルコンピューターを導入し、58年度より宛名印刷や名簿の管理をこれでおこなうことになりました。この機会に名簿の整理をおこないますので同封の調査表にご記入の上返送下さるようお願いいたします。

○関東支部設立される

昭和57年9月19日、東京農林年金会館にて発会式が行われました。(連絡先 〒111東京都台東区 宮崎定典 TEL<03> 又は 〒257 神奈川県秦野市 鈴木昌治 TEL<0463>)

大阪を中心とした関西地区でも支部設立の気運が高まっています。この機会に関西支部の設立を実現したいと思いますので、有志の方は事務局までご連絡下さい。(担当者 野村重信)

また、地方での会合を計画されるときには事務局までご連絡ください。地区別の名簿を作成いたします。

○第9期役員紹介

昭和57年5月23日の総会で以下の方々承認されました。任期は昭和59年3月31日まで。

- 会長 新美 一博 (62M)
- 副会長 杉浦 正勝 (62M)
- 事務局長 山田忠比古 (64E)
- 会計 関谷 昌久 (65E)
- 〃 間崎 保 (67M)
- 監事 山野 清一 (短)
- 〃 稲垣 俊男 (74E)
- 評議員 天木洋志彦 (62M)
- 早川 謙二 (63E)
- 武 克治 (63M)
- 吉田 公一 (65E)
- 野村 重信 (66M)
- 富田 和男 (66E)
- 青山 正治 (67M)
- 田辺 幹知 (67M)
- 下郷 正二 (68M)
- 直江 弘文 (68M)
- 矢野 治久 (69M)

ました。各企業の先進技術、工場経営の実態を自分の目で確かめられることは技術者にとって血になり肉となるものです。とくに各企業に勤務されている人にとっては自分の仕事上、あるいは管理技術を習得する必要性から他企業の工場見学を望んでみても受入側の許可が容易に得られないのが現実の姿と思います。その意味から、技術協会主催の工場見学会は大きい意義と特徴を持っていると言えます。

次に協会誌について述べます。協会誌は大学と卒業生を結ぶ一つのコミュニケーションの場と言えます。卒業生の活躍を記述した論文は大学へ伝達されて、学生に読まれ、将来の就職先希望の源となる可能性を持っています。また卒業生は協会誌を通じて母校の発展の様子、先生方の近況を知り、昔の思い出に心がなごむものと思います。

どうか卒業生の皆さん、自らの技術力のレベルアップと巾広い知識の吸収のために大同技術協会に積極的に参加されることを望みます。皆さんの支援が多ければ多いほど、技術協会の力がつき発展が期待されると思います。

この技術協会の主旨に賛同し、入会を希望される方は、同封の郵便振替用紙または、現金書留にて年会費3,000円也を納入して下さいをお願い致します。

問合せ先

〒457 名古屋市南内大同町2-21 大同工業大学内  
大同技術協会 Tel<052>611-0511  
青山・野村・山田  
郵便振込 名古屋9-56363



評議員 石川 常夫 (70M)  
井上 孝司 (71M)  
大沢 正 (75E)

名誉会長 浅田 千秋 学長  
顧問 石橋 正二 教授 (M科)  
" 佐土根範次 教授 (E科)  
" 河内 睦雄 教授 (AC科)

の各先生方をお願いしています。  
建築、土木系の評議員が不足しています。自選、他選は問いませんので、会の運営にご協力願える方は事務局までご連絡下さい。



# 議事録

◎第1回事務局連絡会

昭和57年6月19日

- 議題 1. 新役員・委員の紹介  
2. 名簿委員の選出  
3. 窓口業務について (担当者等)  
4. 会報発行について  
5. 名簿管理のコンピューター化について

◎第2回事務局連絡会

昭和58年2月2日

- 議題 1. 事務局の業務経過報告  
2. 名簿原簿の更新作業について  
3. 会費納入者リストの作成について

◎第1回評議員会

昭和57年11月6日

- 議題 1. 関東支部発足会の報告  
2. 関西支部設立準備についての報告  
3. 57年度卒業記念品について

4. 58年度総会の日程  
5. 名簿管理のコンピューター化について  
6. 20周年記念行事について

昭和57年度 大同工業大学同窓会決算

取 入 の 部		支 出 の 部	
科 目	金 額(円)	科 目	金 額(円)
前年度繰越金	16,558,339	総 会 費	7,250
終 身 会 費	4,710,000	会 議 費	52,000
利 子	64,582	通 信 費	100,750
名 簿 代	683,330	名 簿 作 成 費	2,307,300
寄 付 金	10,000	会 報 準 備 費	6,500
		交 通 費	100,900
		事 務 費	164,720
		備 品 費	1,529,000
		関東支部設立援助金	100,000
		定 期 預 金	12,053,657
		次年度繰越金	5,604,174
合 計	22,026,251	合 計	22,026,251

定期預金 東海銀行 12,506,337円(利子452,680円含)

## 編集後記

同窓会員の皆様へこの会報をお届けできることは編集委員として喜びに堪えません。

同窓会報として創刊号が発刊されて以来12年余り経た後にやっと第2号ができました。この間多々会員の皆様には、ご迷惑をおかけしたと存じます。同窓会報は、互いに会員を結ぶ友として、また母校大同工業大学とを継ぐ絆となるように定期的に刊行したいと思います。

今後とも会員の皆様のご協力を頂けますようお願い申し上げます。

編集委員 杉浦正勝・吉田公一・青山正治

## 昭和58年度 同窓会総会・懇親会御案内

日 時 昭和58年 5月22日(日) : 大学祭期間中

総 会 午前11時00分

懇親会 午後 0 時00分

場 所 総 会 大同工業大学大同学舎201教室  
懇親会 大同学園体育館 4 F ミーティングルーム

懇親会費 1,000円

なお、準備の都合もございますので、同封のハガキで、出欠のご通知を5月18日までにお願い致します。欠席されます場合も会員名簿の点検・整理のため調査表ご記入のえう必ずご返送下さいませようお願い致します。